

山形県民教連通信

Contents

<http://www.asahi-net.or.jp/~gy6e-kjm/>

2023.9.30 No.77

巻頭言「あすぽーと」に学ぶ	(設楽会長) ... 1
<特集> 東北民教研浅虫集会報告	... 2
記念講演-3 国語、作文-4 社会-5 算数数学-6	
生活指導-7 障がい、生活科総合-8 学特別分科会-10	
街角の平和論「砂の文化誌から」	... 13
本の紹介	... 15
随想「沖縄で暮らす」	... 16

山形県民間教育研究団体連絡協議会 通信
 <発行人> 山形県民教連事務局
 〒990-0044 山形市木の実町12-37
 県教組山形地区支部内
 TEL/FAX 023-631-2112/2126
 E-mail yamagata@yamagata-kenkyousou.gr.jp
 <編集人> 鬼島 悦雄 kijima@e.email.ne.jp

巻頭言

この夏、考えたこと
 「教師の仕事」とは
 『あすぽーと』に学ぶ

山形県民教連会長 設楽 隆雄

この夏、私は「教師の仕事」について考える機会がありました。

そのきっかけとなった一つは、私が所属する県生研（山形県生活指導研究協議会）山形サークルの6月定例会での若い先生の発言でした。先生は、「授業をやるのに自由がない。毎週担任会で進度を確認し、いつまでにどこまで進み、定例テストの日程も決められる。」と話されました。

私は驚きました。これでは、子どもたちにあった指導ができず、理解できずにおいていかれる子どもたちが出るのではないかと思ったからです。

もう一つのきっかけは、浅虫集会の「生活指導と教育」分科会での「教師は指示し規律を守らせるだけの労働者になる」という言葉でした。

この言葉を聞いた時、私は、佐藤学氏の講演で見た映像が脳裏に浮かびました。日本の先を進んでいる（悪い意味で）アメリカの授業風景です。一人一人が仕切られた机に向かい、パソコンで黙々と問題を解く授業の映像です。必要なときにだけ



子どもは手を挙げて教師を呼びます。そこには、みんなで意見を交わし合い考えを深めていく姿はありません。

今、教師は学習内容が増え、業務も忙しく教材研究などにかかる時間が少なくなってきています。子どもたちも、生まれた時の能力や生育歴によって個人差があります。

その結果、教師は、子どもたちの理解度は人によって違うとわかっていても、マニュアルに沿って授業を進めざるを得ない状況に置かれてしまっています。わからない時は子どものせいにしてしまうことが危惧されます。

かつて、教師は、どの子も「楽しく・わかる授業」をめざして取り組んでいました。どの子にも学ぶ楽しさを感じさせ、学習に意的的に取り組んでいく姿を授業で追究していたのです。

子どもたちがわかることよりも進度が重要になっている学校。子どもたちは息苦しく、楽しい学校ではなくなっているのではないのでしょうか。

そして、教師の仕事とは何だろう、と考え、調べると、以下のように書かれてありました。

学習指導では、授業で(1)基礎的・基本的な知識・技能。(2)知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等。(3)主体的に学習に取り組む態度。を育てる。

また生活面や道徳面の指導を通して、児童・生徒が健全に成長できるようサポートする。そのほか、学級経営や学校行事の企画・運営、授業の準備、部活動指導、進路指導、保護者との交流、地域活動など教師の仕事はたくさんあります。

であるならば、どの子どもにもそういう力や態度を身につけさせ、困っている子どもにも寄り添って成長させてあげるのが「教師の仕事」であるべきです。

今、教師が「教師の仕事」ができる学校への再生が重要だと考えます。

私たち民教連には70年かけて培ってきた子どもを真ん中にすえて取り組んだ多くの実践があります。そういう実践に多くの先生方に触れていただくことが大事だと思います。

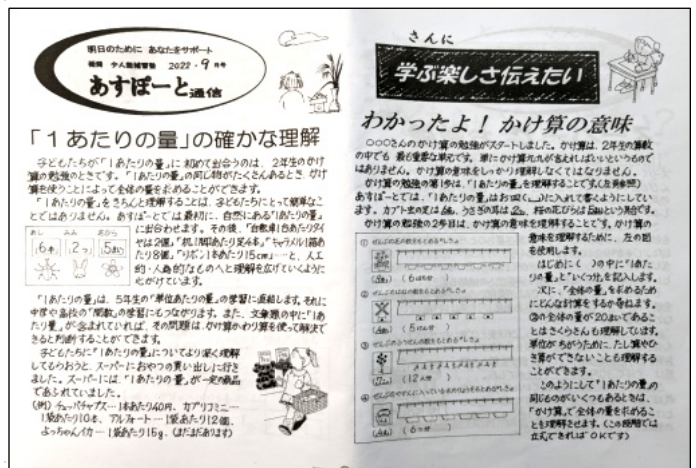
そんな中、今年の東北民教研「浅虫集会」の特別分科会「子どもの学びづらさと生きづらさに私たちはどう寄り添うか」では、一人一人の子どもを大切にしている素晴らしい実践に出

会いました。それは、山形の今野孝氏と阿部敏恵氏が主宰している「父母の子育て同人としてあゆむ『学習支援塾あすぽーと』」の実践です。

「あすぽーと」は、少人数補習塾で、算数や国語の教科の本質に出会わせ、学ぶ楽しさを味わわせることを中心にしています。

学校の授業で理解できなかった子どもたちが、その子に合わせて行ってくれる指導の結果、楽しく・わかる経験を何度も感じ、できない問題もわかりたいと思い、学習に意欲的に取り組むように変わっていきます。一人一人向けの解き方や学習の仕方が書かれている通信、父母への子育てアドバイスなど、とても手厚い指導が行われています。温かい雰囲気です。

学校現場ではここまではできないかもしれませんが、一人一人を大切に育てたいという気持ちをもつことは、教育に携わるものにはとても重要なことだと考えます。



< 特集 > 東北民教研「浅虫集会」参加報告
集会テーマ「学校の中に人間の息吹きを！
子どもたちに希望を！教育に自由を！」
2023年8月7日～9日 青森県青森市浅虫温泉にて

今夏8月7日から9日の3日間、第70回東北民教研が青森市浅虫温泉で開催された。17の分科会、6つの特別分科会、記念講演には地元青森の日作会員で岩大教育学部非常勤講師の工藤ふみ氏が「日記を読み合う中で子ども達は成長する」と題し講演。本県から国語、作文、社会科、算数数学、音楽、生活指導、障がいのある子、国民教育運動、生活科・総合学習の分科会に14名(On-line含)が参加。特別分科会「子どもの学びづらさ・生きづらさに私たちはどう寄り添うか」と「北方教育の現代的意義」に実践や運動を報告。集会参加者は197名、遠くは東京・京都・兵庫からも参加も含め、子どもの事実に基づいた実践発表と分析に熱気あふれる集会となった。

記念講演を聴いて・・・

演題 『日記を読み合う中で子ども達は成長する

- 私が教師を続けられた理由・岩手大学教育学部講義録から - 』

講師 工藤 ふみ 氏（日本作文の会・岩大教育学部非常勤講師）

実践家による講演

- 北方教育は脈々と
継承されている -

久々なのか初めてなのか
東北の北方教育を引き継い
だ実践家のお話が講演になっ

た。北方教育の代表たる綴り方や想画の実践を今の時代にやれるのだろうか、疑心暗鬼で子ども達の日記や作文を紹介されるまま聞き始めた。

講師は日本作文の会会員の工藤ふみ氏、北方教育の歴史に詳しい工藤雅司氏の奥さんであり、現在岩手大教育学部の非常勤講師をしておられるとのこと。岩大がそういう方を講師に招く懐の深さにも頷ける。演題は、「日記を読み合う中で子ども達は成長する - 私が教師を続けられた理由・岩手大学教育学部講義録から - 」である。

○春、子どもたちとの出会いから始まる。子どもたちの新年度に向けての前向きな気持ちや不安、「前の先生がよかった」という正直な気持ちに、短いながら共感するコメントが添えられている。春さがしにクラスで出かけ、つくしを見つけそれを食べたことから、日記は豊かになっていった。学級を飛び出し自然とのふれあい、学びが広がる。自分も常套手段だったが、遊んで食べて終わった気がする。

○友達を思いやったり、先生に対して言いたいことを言ったりは、まさに綴り方指導の入口なのだろう。自分がその時感じたことを書いてもいいんだという安心感が、子どもの本音を引き出していく。教師への批判もみんなに紹介したのだろう。見えていなかったことを正直にさらし、講演の中での謙虚すぎる講師のコメントに人間性が見て取れる。

紹介の日記では、お父さんの出稼ぎが子どもたちの共通の寂しさだったことに気づき、中にはお父さんの想いから離婚したことを重ねて書き綴る子まで現れ、同じ気持ちの子が殻を破って書き始める。寂しかったこと、嫌だったこと、悲しかったこと、嬉しかったこと、共感できること、仲間

の日記を読みながら様々な感情が綴られ始める。日記を書かせたとしても教師と一人の子どもとのやり取りだけだったなら、これらの感情は広がらないのだと今を振り返り地団駄を踏む。

○お父さんを亡くした利君、お母さんを亡くした高くんでは、6年生での日記になるが、死について残された者の気持ちを、帰り道や雪下ろしなど生活の中でふと思い出して綴っている。そして仲間がその子の気持ちを推し測りながら綴っている。「生活綴り方」というが、気持ちだけを言葉にするのではなくその時の様子や行動、会話を入れることで複雑な気持ちが表現できる。シンガーソングライターのユーミンの歌詞は、生活の断片を切り取ることで、その時の心情をリアルに感じさせるのと同じかもしれない。

○「いい暮らしを」と呼びかけては、以前波及した「生活綴り方」として貧困の原因となる社会的構造に目をやりとなるどころだが、紹介された日記とお話からは理解できないで終わった。

○保護者ともつながっていくでは、『ばれた』という笑える詩が印象的だった。修学旅行のあまりの五百円を返金しますという連絡で、

連絡帳の後ろに、

「五百円はお子さんにあげてください。」

先生に似た字で赤ペンで書いた。（-略-）

「ふみ先生そんなこと言うわけないじゃん。」

こんな楽しい日記が、保護者との関りの大切さを物語っている。問題が起きたり心配なことがある時だけつながるのではなく、日情的な信頼関係でありたい。だから、笑いもある関係を築きたいとつくづく思う。

○本音を書いた詩や日記を読み合うには、かなりの数の日記や詩があり、○「いい暮らしを」と呼びかけての部分をごここで数多く紹介してくれた。北方教育が目指した現実を見つめる目が、本音を書くことで開眼し、読みあうことで探求し共有する。今求められている力をつける教育は、北方教育が戦前から行っていたことに驚く。「生活綴り方」がふみ先生に続いたように、いいものは色褪せないし、それに続く教師がさらに増えることを願ってやまない。（早坂 久佳）

分科会・特別分科会

国語と教育

国語と教育分科会の参加者は、青森2名、秋田1名、岩手1名、宮城2名、福島2名、山形1名の9名でした。

私は1日目のみの参加でしたので、レポートの発表もそれに合わせて行いました。

私のレポートは、「一つの花」(小4)の実践でした。これまでの東北民教研で学んできた「文章を読むということは、言葉や文を絵と感情におきかえること」を試行錯誤しながら実践したレポートでした。

「言葉や文を絵と感情におきかえる」には、言葉を大切にしないといけません。そこで、言葉を大切にすることを「語彙的な意味を明らかにする」「文法的な意味を明らかにする」「先行場面と結びつける」の三つととらえたことを伝えました。

また、授業の方法としては、毎時間、書き込み(児童主体)と切り込み(教師主導)を組み合わせる行って、言葉や文を文図にまとめていくようにしたことを伝えました。

参加者からは、「書き込みは、言葉や文を大切に読み取るうえで良い方法である。」「一文ずつ扱う方法もあるが、慣れてきたら、場面ごとに扱う方が子どもたちも飽きないで授業に参加することができる。」「主題は、題名の一つの花の『一つ』から考えることも必要。」「『~してしまう』は、完了の意味だけでなく、不本意な気持ちも読み取る必要がある。」「ゆみ子がコスモスの花をもらって喜んだのは、心が成長したからではなく、ゆみ子は美しいものを喜ぶ気持ちをもともと持っていたからである。」などの意見が出されました。これらは、自分が気づかずにいた意見で、今後の実践に大変参考になるものばかりでした。

2日目は参加できませんでしたが、「『自然のかくし絵』(小3)の読解指導」「漢文に親しむ(中1)」「中3の子どもたちと『故郷』を読む」などのレポートが発表されたことと思います。レポートを読ませていただきましたが、どれも、文

科省がすすめるようなさっと読んで終わりのような指導ではなく、子どもたちと言葉や文を丁寧に読みながら書かれてあることを理解していく真の国語の力を付ける実践でありました。

東北民教研には毎年のように参加をしていて、毎回、鋭い意見でバサバサ斬られるのでありますが、それらは、自分の新たな目を開かせてくれるものであり、とても心地よいものであります。このような学びは、互いに感想を言い合うような学校の授業研究会では考えられないものであり、長年、先輩たちが積み上げてきた東北民教研ならではの学びであると改めて思いました。

(佐賀井 伸)



作文と教育

7月末の日作宮城大会の興奮も冷めやらぬままに東北民教研青森浅虫集會に参加しました。

「作文と教育」の分科会の参加者は22名、実践報告者は5名、3日間に渡り熱心な討論が行われました。多忙な日々の中で、子どもたちが書き綴ったことを丁寧に読み取り、学級で読み合うことを通して、子どもの驚きや感動、心の揺れをみんなでも共有し、その見方や考え方を深めていった報告の数々、参加者の鋭くも温かい発言に何度も胸が熱くなりました。3日目はチャットGPTに書かせた文章と、子どもが書いた日記を比較しながら「ありのままに綴ること」の意味を改めて問うという報告でした。子ども理解についても、最近話題のAIGRWが子どもの「内面」を診断することに触れ、これでいいのかと、「子どもを丸ごととらえる」ことの意味を考えました。

今回は特別分科会で、山形県の北方性教育の先駆者「村山俊太郎」についての話を聞くことがで

きました。彼の業績については山形の瀬野さんから報告がありました。また、綴り方教師としての苦闘ぶりを青森の工藤さんが当時の子どもの作品を通して説明してくださいました。彼の生きた時代は想像を絶するものがありますが、彼も悩みながら成長していった教師なのだと思近に感じることができました。

いつもながら宿泊は数人の相部屋で、1日目は、山形と秋田の組み合わせ、2日目は山形と岩手の組み合わせでした。そこで、いろいろと情報交換できるのもこういう集会に参加したときの醍醐味です。生徒指導の体験談や子どもたちの健全な成長のために現在研究していることなど分科会に匹敵するくらいのお話を聞くことができました。皆、北方性教育の実践家たちなのだなぁと実感しながら帰途につきました。

(近野 享子)



社会科と教育

今年の分科会のテーマは、「誰もが自信をもって教材づくりができる拠りどころを考えよう」(人権・平和・憲法・地域(東北)を串刺しにして)であった。まずは、実践講座として、青森の寺田さんが「地域にこだわった学習の展開と広がり」(=青森からの報告)からスタートした。内容は、彼の教員としての出発である千葉県の中学校からであった。

高度成長下の東京湾岸のコンビナートの、激しい変貌の中での開発混乱下で、親たちも漁業破壊で、子どもたちの戸惑いの中での地域の不安からの学校づくりは、地域の実態と関わらざるを得ない取り組みとして始まった。影絵劇の「私たちの海はどうなるのか」の実践は、その好例だ。その後千葉県の各地への転勤。そして青森に来てからも、「地域に根差す教育の取り組み」は、「地域を知り、親の願いを知り、子どもを共に育てる関係づくり」に奔走した。地域の歴史・伝統文化の継承・伝統芸能・地域の用水堰などから教材を生み出し、「学校が“文化創造の拠点”としての受

け止め」から子どもの成長を啓発していった。民教研や国民教育での科学的なリサーチもあり、地域の課題を丁寧に探り、地域住民との信頼関係を図りながら、「地域を通して世界を考える…」を目指し、子どもとともに、「暮らしの地域」を学びあうことが、「主体的な歴史を作ってゆく」という大切な作業にもなる。長い間の軸のぶれない実践記録は、貴重な指針として継承したいと思った。

(以下～参加レポートの要旨)

「平和のバトンを子供たちにどう渡すのか…」

(山形・田口レポート)

* コロナ禍やウクライナ侵略戦争がもたらす生活破壊からの「息苦しさ」は「一連の“怪しい”岸田政権の軍国化の加速化の様相」も加えて、子どもたちの実態が大きく変質している。「戦争の可視化」や「茶の間での戦争のリアル」が目前にあっても、子どもや青年たちの「現実忌避」の実態は、私たちの「これまでの平和教育」を大きく蛇行せざるをえなくなっているというのだ。「もっと、子どもたちの“生の声”“本音”を聞きたい。」「子どもたちの『世界観』『平和認識』を丁寧に把握したい。」SNSやフェイクに日々汚染されている今、現実、暮らしの出来事の「真実」「実数」は見えてこない。そんな中で、浜田桂子の「平和ってどんなこと…」の教材の力はすごい。保育士の町田ひろみの実践は「平和とは日常の中にある…」を気付かせることであり、「対話優先」の取り組みで、子どもの心を開放し、教師からの「伝言」も受け止められ、「受容」と「共有」ができたというのだ。子どもたちの「意見表明権」は気軽に保障したいし、「未来の平和は教室から…」の思いを子どもたちに実感させたいのだ。

私の「世界史A」での「10分の平和学」や民衆視点からの歴史の創造の教材づくりも、「タラ・レバ」であっても、主体的な視点からの「立ち位置」の生き方は大切だ。直接的な「詳細な戦争の史実」の「教え込み」ではなく、もっと安保に苦しむ「暮らし・日常」の「問題・貧困・抑圧・差別…」からアプローチする「間接的な平和教育」こそ、今こそかえって「積極的な視点」として取り組めるもの。平和のバトンは「いつでも・どこでも・気軽に」渡せるようにスタンバイしておきたい。

「秋田県沿岸に林立する洋上風力発電について
授業するなら」 (秋田・細川レポート)

* 昨年末、秋田県沿岸での洋上風力発電計画が登

場した。売電価格が半値以下の安さで三菱商事が、国家的な風力発電の流れに沿って、県の「脱原発再生可能エネルギーへの傾斜」の流れに沿って浮上した。すでに、一部の地域では大きく進行している。例えば、由利本荘沖北側・南側では、「着床式の風車・65基～出力48万kw」を計画しており、30年12月開始を目指すというもの。これに対して、「海岸から2kmでの巨大風車が、本当に必要なものか？」の疑問が噴出している。「7～8年で建設費は回収可能で、風が吹けばお金がどんどん入る……」のフレーズは拡散し、県も「地域活性化で、千載一遇のチャンス」という期待も膨らみ、誘致促進が加速化している。貧困な漁業地での立地は住民との丁寧な対話ができている。中3の公民での「授業プラン」では、「資源・エネルギー問題」での扱いで、どんな視点での授業ができるのか、地域の若者にどう映るのかが、……大きな焦点になる。生徒たちへのアンケートや地域の人々への聞き取りなどでの生の声では、「無謀な発電計画で、再考を……」の声が多い。「漁業への心配」「里山破壊」などの多くの懸念は、「地域活性化」にはつながらないとの声も大きく、今後の動向に注視したい。

「障がいのある子どもたちを主体とした社会科教育の実践はどうあればいいのか」

(青森・寺下レポート)

*今年で2年目だが、特別支援学級の子どもの関りで、今担任補助として、サポ2で7人の子どもが相手である。他の大勢の生徒との一緒に授業もあるが、生徒たちは「一人一人の個性が強く、興味関心や根気強さの違いもあり、「暴れたり、立ち歩きしたり」のトラブルが日常的、「恒常的な励ましや声掛け」が欠かせない。

そんな中で、3年生の社会科を実践してきた。「学校のまわり・私のまち・働く人」を題材に、ここでの「社会科ノート」づくりを軸に進めた。子どもたちには「人を大切にする力・自分の考えを持つ力」などを願い、「子どもは変わる…・生きる価値を見出す」などの思いを教師が持って進めたい。夏休み明けより、どんな関わりで子どもたちと接してゆくのかが……の議論をした。

「いじめ防止の取り組みについて」

(青森・中の貫見レポート)

*職場での「いじめ・自殺」などがあり、その対応に四苦八苦ししている。吹田市での「いじめ防止プログラム」を参考に対策を苦慮している。シンキングエラーを学び、本校の実態を踏まえて考え

たいが……。加害の否定や被害者の否定など種々の傾向がある。

「歴史から学ぶことで『いじめ』だけではなく、『人権』に気付かせたい……」との声に、具体的な意見が出て、「人権は“命の重さ”でもあるので、総合や社会科で、身近な暮らしや地域の問題から派生させて、ゆっくりと遠くからでもアプローチしては……」の声があった。

(今後の分科会に関わって思うこと)

*今年も昨年同様、参加者が5名と少なかった。青森・山形・秋田のみである。他の全国大会との重なりは今後も続く。じっくりとした議論は出来たが、東北的な広がりはない。

特定の地域にかかわった教材の発掘や地域の実態などの限られた情報のみで終始した。もっと、子どもたちの「息苦しさ」の実態や「平和教育の難しさ」の実相は深まらなかった。何よりも、「ウクライナ戦争」下での、地域や学校での話題は皆無。現状把握の厳しさだろうか。「世界がいま、大きく歪んでいるし、私たちに突き付けているものは……？」の検証をしたい。さらに言えば、もっと、「子どもたちの未来がどう変わるのか、学校の役割とは何か」の、…・根源的な議論がここでも欲しいと思った。

(田口 忠宣)



算数・数学と教育

分科会1 基礎講座

「楽しい、分かる、好きになる

～高校数学の授業づくり」

大内 国芳さん(岩手)

分科会2～4〇実践レポート

「正負のカード」 千葉晃弘さん(岩手)

「正負の数の乗法」岡崎弘志さん(青森)

「多角形の内角の和」長内尚明さん(青森)

「手づくり授業は教育条件づくりと一体に」

大内国芳さん(岩手)

「新しい概念にステップアップする

教材と授業」早坂久佳さん（山形）

「数学でのICT活用」逢坂友暉さん（青森）

<実践報告>

「数学でのICT活用」逢坂友暉さん（青森）の話し合いより

青森市の実態として1人1台クロームブックが配付され、遠隔授業のみならずアンケートや学校評価、生徒会の意見箱など様々な活動に使われている。ICT活用のメリットとして、

数学的な概念や問題を視覚的に表現できる。

グラフや図、アニメーションを通して抽象的なアイデアを具体的に理解できる。

ICTを活用することで意見の収集や共有、板書などにかかる時間を短縮し、考える時間や表現する時間がとれる。実際に授業で使った例としてデジタル教科書で回転体のシミュレーション、ジャムボードを使っての座標への書き込み、正負の数や数の大小の視覚化などが紹介されました。

<話し合い>

- ・視覚化といっても、回転体などあくまで2次元のものではないのか。
- ・そのレベル（回転体）のことはICTを使わなくてもできるのではないのか。アナログ教具であれば、教室での実演でライブ感があり生徒たちの集中力も増すような気がします。そこから、生徒の見方、考え方が広がっていくように思います。
- ・板書にかかる時間の短縮をメリットと押さえているが、板書しながら教師の意図や解答などを見せていくことも大切な学習場面ではないのか。
- ・経験年数の少ない若い逢坂先生が、自分の実践をみんなの学習の材料として提供して下さったことがありがたい。これからのますます力量を高めていくことにつながると思う。今後に期待したい。
- ・急速に進むICT化、デジタル化に対して、サークルや地域、職場の懸念や疑問を共有し、共育的に使うにはどうするかなど一緒に考えていくことがとても大切だと思います。（阿部 敏恵）



生活指導と教育

5県14名の参加。レポートは4本で、1日目は自己紹介と実践講座レポート1本、2日目が3本、3日目は参加者が5人程度少なく、レポートもなかったため、各県の状況や東北ブロック長などの確認を行った。

1日目、青森の阿部さんから今まで取り組んできた学級行事の取り組みの紹介。今の学校現場では「スタンダード」「方式」と、授業の進め方や週予定まで細かく決められてしまい、自由な雰囲気なくなり、学級担任や子どもたちも息苦しさを感じている。その中で「楽しい学級」をどうつくり出していくかということで、全校で取り組んだ「全校かくれんぼ」、学びにも遊びを取り入れる「漢字大相撲」などの実践を紹介していただいた。一人一人に寄り添い、「誰もが居場所のある学級」を進めるのが教師のがんばりどころである。

2日目、3本のレポート発表。1本目は中学国語の実践で万葉集山上憶良の句について読み取っていく。子どもたちは今まで過ごしてきた家庭文化を背負っている。それが言動につながっていく。教師はそれを見極めることが大切であり、家庭の様子を知ることが大事である。コロナ禍で家庭訪問や懇談会が減り、子どもたちの家庭状況を十分知ることができず、子どもたちの言動の裏にあるものは何なのかを捉えきれずに指導してはいないだろうか。

2本目は、小学校3年の女子が「さん、キライナヒト～」と聞くという出来事に対する実践だった。細かく子どもとのやり取りを記録していて、子どもたちから話を聞いて、指導していった。誰かを嫌いになることでつながることはイジメにつながっていく。イジメをなくすためには、仲間を知り、仲間を受け入れてどうつながっていくかが大切である。

3本目は、自閉症スペクトラムの小3男子との実践。学習・係活動はしない、自分のしたいことは、授業に関係なくする。そこで、方針を立てて取り組む。うまくいかないことが多かったが、彼のできること、できないことが見えてきた。そこで、手立てを立てて試行錯誤しながら取り組んだ結

果、彼の中で変化が見られた。今後のことについては、人間関係をどうつないでいくか、他の子へのケアも考え、学級の雰囲気を変えていくことが出された。

どのレポートも学級で抱えている問題に関わっていて、話し合いを通して今後の学級づくりへの取り組みの参考になった。台風の影響で全生研沖縄大会からなかなか帰られず、遅れたり参加できなかったりした方もいたが、各県から多くの仲間が参加して充実した実践分析をすることができた。

(大場 理之)

障がいの ある子と教育

東北民教研には何度も参加していましたが、青森集会は初めての参加でした。「障がいのある子」の分科会は、青森、秋田、岩手、福島と東北各県から参加者がおり、各県の特別支援教育の状況を交流しながら、実践レポート検討を行ってまいりました。今回、都合により、1日目・2日目のみ参加しましたが、もっと参加したかったと思うレポートや交流がたくさんあり、後ろ髪をひかれる思いで帰ってきました。

分科会ではまず、特別支援学校で児童生徒と保護者への対応についての悩みのレポートについて、検討を行いました。うまくいったケース、うまくいかなかったケースを紹介してもらい、始めのケースでは、支援学校でのカリキュラム(例：遊びの指導)と保護者のイメージしている学習カリキュラム(教科学習)の相違から、カリキュラム編成への要望が出たそうです。保護者の考えを否定するのではなく、保護者のニーズがどこにあるか聞き取り、きちんとうまく向き合うことで保護者に信頼を得ることができたそうです。とある講演で『信頼関係があれば、教師と親が同じ目線になっていく』と言っていたと内容を紹介してもらいました。これは、教員が大切にしなければならない視点だと感じました。

次に、特別支援学校と特別支援学級の両方勤務経験がある方から特別支援学校と特別支援学級での教育についてのレポートがありました。「支援

学校だから・支援学級だから」というより、各学校の意識によってインクルーシブ教育が進んでいるか、そうでないか決まってきたように感じました。自分自身の経験にあてはめてみても、同じだと感じます。特別支援教育がスタートして今年で16年経ちますが、理解が進んだかと言われると、「まだ」と言わざるを得ません。自分の学校、そして山形で特別支援教育、インクルーシブ教育をさらに進めるには、と考えながらレポートを聴きました。

夏の集会は、東北各県の情報や実践を聴くことのできる貴重な機会だと感じています。今度は、私だけではなく仲間も誘って参加したいと思っています。

(後藤 美子)



生活科・ 総合学習と教育

前回の青森県開催の集会は2015年、今回と同様浅虫温泉での開催であった。前任の県民教連事務局長の設楽さん(現会長)から大役を引き継ぎ、最初の東北民教研であったこともあり、印象深い場所だ。生活科・総合学習分科会には2008年から参加している。きっかけは、第57回上山集会で分科会責任者兼レポーターを引き受けたことだった。以来、都合で参加できなかった年もあったが、この分科会との付き合いは15年になる。

ワークショップ

2日目の早朝から本分科会恒例の「たんけん・草花あそび」の巡検が行われた。宿泊会場となったホテルの眼前はまさに海、砂を含んだ土壌から植生が野山とは異なるかと思いきや、オオバコ、ヨモギ、エノコログサ、フキ、ギシギシ、カヤツリグサ、フジ、クズ、など「草花あそび」には常連となる野草たちと小一時間の戯れを楽しむことができた。

この日の昼食休憩時間を利用して、生葉の藍（あい）を用いて「草木染め」を体験する。藍の葉と水をミキサーにかけ、染め液を作り、シルクの布を浸していく。参加者が思い思いの絞りを工夫する。私は今回初めて「棒絞り」に挑戦してみた。何度やっても、草木染めの奥深さに魅了される。



レポート分析と講座

1日目は山形の庄司さんから「山形の宝！宮町ミステリー」伝承をキーワードに地域を探究する総合学習の実践を発表していただいた。城下町山形の職人町や寺町の様相を今も残す学区に残る伝承「宮町七不思議」の場所を地域での聞き取りをもとに訪ねていく活動。

コロナ禍で小学生生活が始まった4年生は地域や人との交流が制限され続けてきた。今、ようやく地域を歩き人々への取材が果たせるようになってきた。学区内の学校近隣の宮町に集中する七不思議の伝承とそれにまつわる史跡の数々。これらの好機を指導者は生かしたいと考えた。伝承調べを通して、子ども自身が見えてきたことは、伝承者の高齢化 地域芸能継承への努力。分析は、指導者が知りたい「子どもは、今後、宮町七不思議をどうしたい？」への寄り添い方、指導者である担任（団）の立ち位置等について参加者からの意見交流が続いた。

2日目の午前は青森の寺下さんから「沿岸漁業と子どもたちの学び」をテーマに沿岸部の小学校で取り組まれている地域性を生かした体験活動の報告があった。八戸市から階上町にかけて広がる種差（たねさし）海岸沿岸の小学校ではフノリやウニといった海の幸の収穫、海水から塩作り、地引き網、ホヤの殻を再利用したランプシェード作り等の体験活動が盛んに取り組まれている。意見交流では、一つ一つが価値ある体験であるものの、この活動が何につながっていくのかを子どもが明確にもつこと、例えば「海水から手間暇かけて作った塩」そこからどんな追究が展開されていくのか？追究を通して得られるメタ認知を大事にすべき事

などが話し合われた。

2日目午後、福島の高谷さんから「矢吹町の戦没者慰霊碑と矢吹飛行場記念碑から考える平和教育」と「ジェンダー教育を通して主権者教育を考える」の、2本の実践が報告された。前者は高谷さんのご家族にまつわる事を発端に戦場へ見送られる者と見送る者の思いに迫り、戦争と平和に関する記事を読み、感じたこと考えたことを綴り、互いに発表し合う実践。後者は、トイレ掲示によくあるピクトグラムに色を塗らせてみたり、無色のランドセルに好きな色を塗らせることを通し、遠くない過去ではその色が限定されていたこと、今もなおその限定された概念が残っていること、しかし、どんな色を塗っても構わない多様な価値が広がりつつあることを考えていく授業実践であった。

慰霊碑は学校の敷地の隅の方に建っていることがある。戦没者名だけのものもあれば、絶命の地を記した碑もある。碑から拾い出し、地図上に落としていくと、アジアのどの地域でどのくらいの人々が亡くなっていったのか可視化することも可能なことがある。

1人ひとりの子が学びの主体者となって考えていく平和やジェンダーについて、大上段に構えるわけではない直向きに考える授業のあり方をあらためて学んだ気がした。

3日目は岩手の吉田さんがこれまで多くの幼稚園や小中学校、大学の集中講義などでお話されてきた「子どもの成長と発達」をテーマに、子どもを取り巻く環境の変化がどんな影響を及ぼしているのか、子どもの生活リズム確立のために私たちが気をつけて取り組んでいきたいことをわかりやすく丁寧に解説いただいた。教員になったばかりのみなさんにも、これから教員をめざすみなさん



にも聞かせたい話をお聞きし、3日間にわたる分科会を終えた。私たちの実践の根っこにあるのはゆるぎない全面発達保障という思いだ。浅虫の地においても、それらをあらためて確認できた3日間であった。

（東海林 仁）

特別分科会

核燃サイクル問題
・ 原発再稼働

* 反原発運動の集会では、核燃料施設問題についての基本的な情報周知から、ということで、テーマとしては、「青森県における反原発運動の特徴」というものであったが、まずは、「原発と核燃サイクルの違い」などのレクチャーから始まった。「火力発電と原発との違い・核分裂の意味・ウラン235とウラン238との決定的な差・プルトニウムのこと・原子炉(軽水炉)のしくみ・メルトダウンの意味等々の説明だ。講師は、青森県労連の奥村氏。丁寧で、詳細な解説は続いた。青森県六ヶ所村に、原発ではない「核燃料サイクル施設」がある。高速増殖炉「もんじゅ」の燃料である。プルトニウムは自然界には存在せず、原発の核分裂過程で作られ、使用済み核燃料から取り出す必要がある。つまり「再処理」によって回収するのだそうだ。しかし、「もんじゅ」の廃炉で、プルトニウムの使い道が途絶え、再処理工場の存在意義は喪失した。原子爆弾への転用も可能なプルトニウムの保有について、日本は「持たない」と国際公約しているはずだが、実際には、約65トン(=原発6000発分)の保有があるのだ。そこで、今MOX燃料を普通の軽水炉原発で使う、「プルサーマル計画」が浮上したが、技術的には確立していないというのだ。

青森での反原発・核燃運動は、現地での受け入れと同時に出発したが、十分な動きにはならなかった。その後の「青森9条の会」や「3・11東日本大震災」などの中で運動は変質し広がりを見せた。2020年には「青森県を、高レベル放射性廃棄物の最終処分としない条例求める会」が発足した。が、2か月で頓挫した。代わりに新組織が生まれたが、運動はあらたな段階にあるというもの。



討議の中で、「どうする? 原発のごみ全国交流集会」のレポート報告も出されたが、十分な深まりは見えなかった。昨年も参加したが、基本知識での学びあう「学習」がメインで、情報不足は免れないが、もっと反核運動の取り組み・課題・問題点などの動向が見たい。

地域住民の一人としての、教員の参加は厳しいが、多様な取り組み形態はあるはずである。地域の未来を創る「子どもたち」に、「どんな未来を描けるのか」~地域の文化センターである「学校」の役割は何か。「子どもたちの“声”はないのか?」...等々、多くの懸念が残った。(田口 忠宣)

特別分科会

子どもの学びづらさと
生きづらさに 私たちは
どう寄り添うか

今回は、青森、宮城、山形から参加者が集まり、中身の濃い交流を行うことができました。

この特別分科会に参加しようと思った理由があります。日頃子どもたちと顔を合わせている「楽しそうじゃないな」と見える子どもたちをたまに見かけます。また、休み時間はいきいきとすごしているのですが、それ以外は表情の変化があまりみられない子どもたちも見かけます。この分科会のレポートから今の学校で何ができるか考えたいと思い、参加を決めました。

まず参加者それぞれから、自分たちの周りの先生たち・子どもたちがどうなっているか現状を共有していきました。ここでは小学校と特別支援学校、子ども食堂での子どもたちの様子が出されましたが、勉強がわからない、居場所がないといった安心感を持たずにいる子どもたちがいることが共有されました。そして教員たちは、忙しい、疲れている、やりたいことより「やらなければならない」ことに追われているということも共有されました。

次に、今野孝さん、阿部敏恵さんから『父母の子育て同人としてあゆむ「学習支援塾あすぽーと」の取り組みから』の取り組みについてお聞きしました。子どもたちに学ぶ楽しさを伝えたい、わかった! できた! を実感させることをねらいに運営し



特別分科会 教員の 「働き方改革」のいま と教員不足問題

ているとのことでした。また、原体験を大切にすること、保護者の子育て同人であるために、通信で子育てのヒントを提供していたり、夏休みの過ごし方についてのアドバイスをしてくださったりします。子どもたちの自由研究のサポートをしてくださっていましたが、子どもたちの頑張りが見られる作品になっており、永久保存版になる自由研究でした。

学校でもあすぽーと同じねらいで学習を進めているはずなのですが、何が違うのでしょうか。それは、「一人ひとりのわからないところを、スモールステップでできるようにしていく」からだと思います。学校では、時間に追われ、みんなができるところまで到達せずに次の学習に進んでしまうことがあります。成長のスピードがそれぞれ違うように、学びのスピードも違うのです。学校はそれをどこまで保障していくか、そして、子どもたちがいきいきと学ぶ授業づくりをしていくことが、これからの学校の在り方につながるように感じます。

(後藤 美子)



会場の1808号室が狭く感じるほど10名を超える参加。自己紹介後、福島伊藤さんと青森の一戸さんから状況報告をしていただく。伊藤さんは定年退後、再任用していなかったが、病代がないため、年度途中から代替教員となり、今年度も引き続き担任になった。文科省の資料を基に教員の勤務実態から勤務改善があまり進んでいないこと、精神疾患で休職している教師が増えていること。その結果、教員希望者が減り続け、深刻な教師不足の状況である（山形県の不足人数が0となっていたのに驚き）。

また、一戸さんから青森県の状況報告があり、全ての学校で欠員が補充されておらず、4名も配置されていない中学校がある。組合では、早急に改善するように緊急の申し入れを行った。どちらからもわかったことは、学習内容の過密化や業務の増加、子どもの変容と保護者対応等で長時間労働の実態（いわゆるブラックな状態）が減らない。一人の教員が対応できることも限界を超えている。今すぐに対応しないと学校運営が成り立たなくなってしまう。参加者からもそれぞれの県や地区の状況を話され、深刻な状態であることが話された。議員の方も参加しており、県・市議会で現状を強く訴えたことが出された。今早急にすべきことは何なのか、何をなくすかを国にも訴え、また、父母や地域に今の現状を伝えていき、運動を広げていくことの重要性を強く感じた。（大場 理之）

特別分科会

北方性教育の 現代的な意義

村山俊太郎とひでの「顕彰碑」建立と今後の課題
「顕彰碑」建立までの経過を報告

北方性教育運動の指導者の一人である村山俊太郎とその妻村山ひでの顕彰碑が、山形県天童市山口の「来運寺」（村山家菩提寺）墓地に完成し、2023年5月24日、除幕式が行われた。除幕式には県内外から70名、祝賀会には60名が参加した。

村山俊太郎の顕彰碑建立の試みは40年前からあった。しかし、中心的に関わった方はすでに亡くなり、また健康上動けなくなった方も出て頓挫していた。

先輩たちの想いを何とかして実現したいと検討してきたが、県内の綴り方教育は衰退し、「北方性教育」を「キタカタ性教育」などと読む人が出てくる中で、どう進めたらよいか迷っていた。

2017年、ご子息・大東文化大学名誉教授 村山士郎氏の『村山俊太郎 教育思想の形成と実践』の出版を契機に、翌年の2018年、顕彰碑建立実行委員会準備会を立ち上げ、『村山俊太郎 教育思想の形成と実践』出版記念講演会を開催、県内外から60人余り参加した。そこで、実行委員会を正式に結成し、顕彰碑建立の趣旨と計画を公表した。

実行委員会では、すでに村山俊太郎について知らない人が多くなっている現住、俊太郎の生き方・実践・理論の学び直しが重要と確認し、学習活動と並行して顕彰碑建立の準備（立地、規模、顕彰文）を進めることにした。コロナ禍で思うよう進められなかったが、これまで、村山士郎氏を講師に学習講演会を3回実施した。

俊太郎の生家がある天童市山口地区の高台にあった共同墓地に俊太郎とひでの墓があったが、それを2021年、同地区の平地にある村山家の菩提寺「来運寺」の墓地に移設することになった。これを契機に、長年の懸案であった顕彰碑の設置場所を移設する墓に隣接させることが決まった、さらに、俊太郎と共に生き・闘い、俊太郎没後も遺志をつぎ、生涯、平和と民主主義、教育運動、母親運動等に取り組んだ村山ひでも一緒に顕彰しようということになった。

22年、墓に顕彰碑を設置することを、俊太郎とひでの子供たちからも同意を得た。また、住職が承諾してくれたことは心強かった。建立の計画を立て、募金活動に入った。士郎氏を入れて顕彰文の検討を繰り返し、23年3月7日に完成をみた。

今後の課題

「顕彰碑」建立実行委員会は、「顕彰碑」を北方性教育運動の共同の遺産として保存し、

俊太郎とひでの生き方と実践・闘いから学び現代に生かす「恒常的学習研究組織」に発展させることを提起。墓前祭、碑前祭、定期的な「学習会」などを実施していきたい。

村山俊太郎は、戦前、教育労働者組合を結成したという理由で、生活綴り方事件で2回「治安維持法」で弾圧された。また、村山ひでは戦後アメリカ占領軍によるレッドパージで弾圧され職場から追放された。

戦後、治安維持法等による思想犯・政治犯の解放は「ポツダム宣言」に基づいて連合軍によってなされたもので国民の闘いでなされたものでなかった。歴代の政府は「治安維持法は適法」としており、治安維持法犠牲者に対してはまだ謝罪も賠償もない。

日本を単独支配したアメリカ占領軍は、反ソ・反共による冷戦が強まる中、施行された日本国想法の下で日本の民主化の闘いを弾圧（レッドパージ）しただけでなく、戦前侵略戦争を遂行した政治勢力の復権をはかり、民主運動への弾圧、再軍備、日本国憲法改悪を後押してきた。これが現在の政治の歪み・反動化の源流になっている。

「治安維持法犠牲者への国の謝罪と賠償、レッド・パージ犠牲者への謝罪と賠償の実現」は、日本を真の平和と民主主義、人権の国家・社会へと志向する勢力はすべて等しく担わなければならない課題であると提起した。（瀬野 幸男）



街角の平和論

砂の文化誌から～
砂戦争を再考すると

田口 忠宣（歴教協）

私たちの社会は砂から構築されている。現代の都市は、限りなくその建造物や町並みは、砂の産物である。砂の役割は、「舞台の黒子」のようなもので、したたかで重要な役割も持っているのである。今回は、「砂戦争の詳細」も交えながら砂の不思議を紹介したい。

先日、「3.11」を前に三陸の被災地に移転し、「命と祈り」をテーマに活躍する、世界的な「砂のアーティスト」が紹介されていた。砂上の楼閣など、一般に砂の持つイメージは、なぜか「儂さ・愚かさ・無用さ・悲嘆…」といった人間のもらい側面の象徴として強調されている。

しかし、マイケル・ウエランドは「砂～その文明と自然」（築地書館）の中で砂の驚異的な役割を論じた。彼は、ミヒヤエル・エンデの「果てしない物語」（1983年）の中で、たった一つの砂でファンタジア国家が崩壊し、かつ甦らしもした・・・というのだ。つまり、「世界が砂から始まる・・・」という言説は、知者の深層心理として生きているという。風化ではなく、砂を擬人化しているならば、「一つの砂に世界を見る…」という。人との違いは、砂自体が「終わりがなく、何度でも生まれ変わる」・・・ということらしいのだ。

砂は一般に、岩石の風化から生まれ、大半は地球上に多量に存在する石英という鉱物からなる。およそ70%である。風化ではないが、マグマが冷やされて、黒曜岩のような火山ガラスの破砕も砂粒、サンゴや貝の化石の破片も砂、沖縄のお土産でも知られる「星砂」（=有孔虫の化石）も砂の仲間であり、その種類は広く、生き物からのルーツもある。一握りの砂には、いわゆる砂粒から、より細かいシルトまで100万粒の鉱物が含まれているという世界だ。

現在の砂の定義は、「様々な鉱物の粒子で、直径が2ミリから0.0625ミリの粒子…」とされている。2ミ리를超えたものは「砂利」といい、5ミ

リ以上は「礫」（=れき）だ。遊園地での砂場は、もちろん砂利である。むかし、三陸の某海岸で「鳴き砂」にであった。英語で、「Singing sand」（=歌う砂）で、石英粒が擦れて「キュキュ...！」と発する音が心地良かった。今は「全国鳴き砂サミット」という保護団体もあるそうだ。



鳥取砂丘

私たちは暮らしのなかでは、河川での「浸食・運搬・堆積」の作用の中で、砂に出会う。急峻な山地の多い日本では、海に運び込む砂の量は半端ない。未だに、訪れてはいない「鳥取砂丘」は世界の砂漠を彷彿させる観光名所だ。しかしなぜか、「砂資源の争奪戦」が激しい今日、無限にあるはずの砂漠の砂が、現代建築などのコンクリートには、全く使えないという致命的な現実がある。それは、「砂漠の砂が塩分含有量」が高すぎること。砂漠での植物には不向きであるように、塩分の濃さは、「アルカリ骨材反応」を起こすことでの、建造物の強度や安全性が図れないとの理由なのだ。

もちろん海砂も同様だが、浸食・風蝕の激しい地域の砂は、摩耗が大きく、～これも不採用の理由だ。したがって、ドバイの高層タワーや多くの人工島やサウジアラビアでの都市空間も、圧倒的な砂漠の国なのに、建築の主役の砂は、地元の砂漠砂は使えない。オーストラリアなどからの大量の輸入に依拠しているのだ。

石弘之によれば、世界での砂需要では... 2014年のUNEPによると、年間で500億トンの砂が採掘され、その7割は建設用の骨材だ。アジア・アフリカ・中南アメリカなどの発展途上国では都市の大規模な建設ラッシュが続いている。世界での砂の市場規模は、約700億ドル、産業ロボットの市場と同格であるといわれている。その多くは、前述したように、河床・河岸・海底・陸上の堆積層であって、砂漠の砂ではない。今や、希少なグロー



バル商品と言われている。取引総額は過去25年間で、約6倍。砂資源を違法に採掘や売買する国は、世界70か国に及ぶ。そこでは、“砂マフィア”と呼ばれ、取引を牛耳る闇組織が暗躍している。中国、インド、ナイジェリアなどでは、役人・警察・軍部が結託していて、多くの反対者などの殺害さえ起きていることは「公然の秘密事項」である。

例えば、具体的な事例としてインドネシアを挙げる。石のレポートからのまとめだ。世界で4番目の人口を擁するインドネシアは、土地の不足から海岸や近隣の島の埋め立てからの開発が激しい。世界有数の島国でもあるインドネシアでは、堰を切ったような砂資源の採掘で、次々と島が消えてゆくのだ。もちろん地球温暖化の影響も加えてではあるが、科学者のあるグループでは、「2030年までに、インドネシアの2,000の島が喪失する」と予測されている。首都のジャカルタでは、首都圏人口は3000万を超える。市内の165の高層ビルのほか、111階建ての強大な「シグネチャー・タワー」の建設中。過密ジャカルタの対策としての、～総面積約4,000ヘクタール(=17の人工島建設)の造成が始まっている。この大プロジェクトに対して、漁場の喪失やサンゴ礁の破壊などの頻発での中止への運動など、その主原料である、砂の争奪をめぐる争いは留まることを知らない。

「白砂青松」でも知られる美しい日本の海岸も、古来その砂浜に、開発の手が次々と及び、海離れとなり、砂浜海岸の消滅が進んできた。砂嘴でも有名な「三保の松原」なども江時代以降は、急増する人口増加への水田開発や薪炭林の伐採などでの森林後退に拍車がかかった。森林消失による土壌浸食は土砂の形成を生み、風の強い日本海の海岸には多くの砂丘を形成したが、そのからの飛砂は沿岸地の集落などに多くの被害をもたらした。山形・庄内砂丘での飛砂被害は田畑を埋め尽くし、廃村の被害まで出したのだ。庄内藩の植林対策で、クロマツやスギの植林は、いまも見事な防砂林だ。

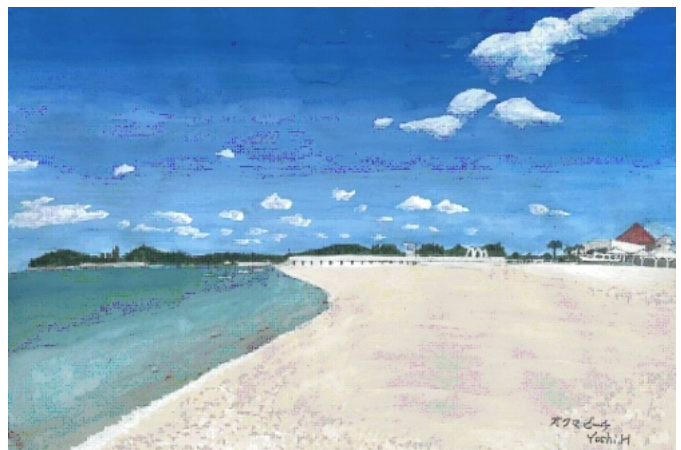
しかし、日本の海岸線は世界でも6番目の長さ。過去100年で、自然海岸の6割は埋め立てなどの開発で人工化してしまった。人気の高かった海水浴場や潮干狩りも大きく減少し、「海と日本人」(2017年、日本財団)での意識調査でも、その関心の薄さが報告された。

数年前に訪れた「九十九里浜」でも、砂浜の減少は浸食の作用だけではなく海岸ぎりぎりまでの宅地化・耕地化・都市化・レジャー化で狭くなり、波消しブロックやコンクリートの突堤が目につく風景となり、無残な光景だ。また、和歌山・白浜海岸の「白良浜」の白い砂も、オーストラリアのパースからの約14万トンの輸入による砂で維持しているという。日本でも枯渇した砂需要では、海外からの骨材輸入が欠かせない。今や、砂浜での海浜植物は、外来植物の侵入が増え続け、6種以上の在来植物がみられた砂浜は、たったの約7%だという。

今後の砂問題について、石弘之は次のようにまとめた。

世界的にも、水資源問題は今や深刻である。水不足は世界的な飢餓や地域紛争にまで及び、アメリカの「オガララ地下水」の枯渇は有名である。また、空気も同じで、大気汚染がひどい中国でさえ、「空気の缶詰」「空気のビニールパック売り」があるという。こうした水や空気と同様に、砂も資源として世界でのひっ迫した事情が頻発しており、国家経済の混乱はもちろんのこと、地球人類の「いのちの危機」にまで及んでいることに注視したいのである。

「世界経済フォーラム」(=WEF)からの警告は、～「地球は資源の収奪によって、自然を危機的な状況に追いやられ、持続不可能な状態に陥っている」…と。



沖縄の風景 (早坂画)

本の紹介

『デジタル人格に克』 見る・描く・作る力

中谷隆夫著 (幻冬舎 1,300円)

この本は昨年に出された「見る力 描く力」Rosy Rose (株) に続いてデジタル問題に関わる二冊目で、さらなる考察、課題を記した出版です。

第一章…どの子にも見る力、描く力を第二章…形象を読み取る力を育む 第三章…見る力 描く力を育む 第四章…情報通信技術 (ICT) を学ぶスキルに、と項目を立て語っています。

中谷さんは美術教育の研究会に学生の時から関わり、新しい絵の会創立当時から会員です。八十歳を超える現在も陶芸家として制作する傍ら、美術教育家としての経験から、今日のデジタル化による環境の変化に警告を発しています。

教員時代では小学校や高等学校などで多くの子どもたち、青年たちの美術の表現に深くかわり続け、研究会をリードしてきました。

退職後は自らの制作 (作陶) にも集中し、百貨店での個展や展示を続けています。美術教育に関しても、多くの論評を研究会の機関誌「美術の教室」や「美育文化」誌などで論じています。

コロナ禍の中で学校現場で進むAI教育や、五感、特に手指で触れ作り出す創作活動の変化に強い危機感をもっていて、今回の出版となりました。

ここに紹介する本も、子どもの成長と発達を自らの教師生活の中から、そして自ら創作する実感から、視覚へ偏重する学校現場 (小学校低学年からタブレットが配られ、画面を見ながらの授業が進んでいます)、教育の内容についての不安を語っています。

私たち新しい絵の会の研究会でもコロナ禍のマスク生活がもたらした3年間での幼年期の子

どもたちの表情の変化や、思春期青年期の心情の在り方を問う内容が報告されています。それはスマホにおける情報の映像化、画像加工等が今の自分のありのままでは人と交流しづらいうという、自己肯定感への不安が感じられ、手指を使つての作業や創造行為によって、ヒトが人として進化してきた歴史をも変えてまうのではと危惧します。スマホやタブレット、パソコンに象徴される映像文化は今後、ますます浸透していくでしょう。保育、学校教育や仕事、趣味、創作…などにも使わ

れていきます。この抗えない動きにどう関わっていくのか、本当に難しい課題だと考えます。

中谷さんが作陶を通しての皮膚感覚を日常的に実感し、大切にしていく立場からの思いのこもった本になりました。若い先生方に広く読まれ、人の成長と表現、創造する力、生きる喜びを考え、追求してほしいと思います。

図工美術教育研究 新しい絵の会 事務局 三嶋真人



～ 随想 ～

沖縄で暮らす

“戦争準備の島” になった沖縄

早坂 久佳 (山形)

北朝鮮のミサイル警戒に加え、中国による台湾有事を警戒する日米合同軍事演習が加速している。沖縄に着いた途端、旅客機より一際大きい爆音を出す戦闘機

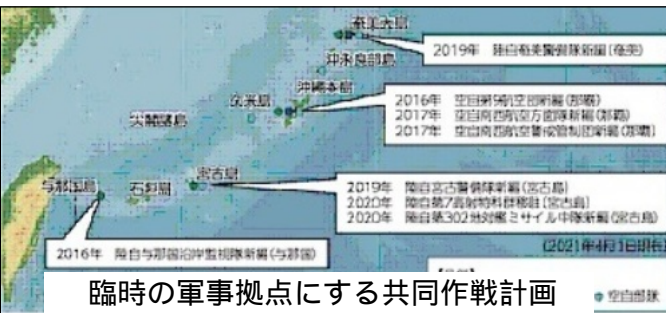


戦闘機 F15イーグル

が空をかすめたり、嘉手納基地の中を通る国道58号線で車の目の前を戦闘機 F15 が横切ったり。ニュースで知ってはいたが、対中国や北朝鮮で、日常的に発着が頻繁になってきているのだろう。

敵基地攻撃のためのミサイル配備が、石垣島と宮古島、さらには、うるま市のホワイトビーチ隣にある海上自衛隊基地にも配備されることになり、本島でも反対運動が起きている。しかし、まださし迫ったものになっていない。なので沖縄のジャーナリスト達が、再び沖縄が戦場になるリスクが高まっていることを警告してくれているのだ。

沖縄返還の折りに、アメリカとの密約を交わしていたことを報道した毎日新聞社の西山氏、2月24日が命日になっている。これは「西山事件」として有罪判決を受けたものだが、今沖縄のジャーナリスト達がこの密約を問題にしている。と言うのも「本土並み」の返還として騙したことや今の沖縄における戦争準備の状況を鑑み、バラ色の返還を口にし、基地を残して今の状況を日本のお金で進めたことだとしたら、本末転倒も甚だしいと言うことだ。



憲法違反の犯罪レベルにある安倍内閣での集団的自衛権と岸田内閣での敵基地攻撃能力の保有は、アメリカとの密約の延長上に成り立っていて、閣議決定で民主主義まで破壊していることに、私達国民は気付かなければならない。まさにプーチンの国と何ら変わらない体質になっていないだろうか。

自民党政権での経済と給与水準・人口問題・働き方問題など散々な状況を誰のせいにするのだろう。テレビニュースで知ったパリやハワイで二千円以上するラーメンは、給与が日本の2倍になっている地域でのこと。20年前イタリアに旅行して物が高いことに気付きながら、給与との関連に思いがかなかったことを反省してしまう。

さらに最近のニュースで10～20代の犯罪が目につく。強盗という凶悪犯罪からSNS異物混入、無差別殺傷や暴走違反運転など、安倍内閣による教育基本法改悪で全国学力テストや道徳の教科化が、子ども達にどう影響したのかとても気になる。日本を愛する道徳強化の教育と真逆の行動に、競争選別教育で未来を描けない子ども達の疲弊が見え、教育政策の間違ひを感じてしまう。そして本物の愛国心なら、この国を今の政権に任せてはならないのだと思う。

昨年沖縄返還50周年を迎えたものの沖縄を苦しめる基地問題は、安保改悪と日本のミサイル基地建設による戦争準備から、2度目の戦場になる危険性をはらんでいる。

沖縄の威勢のいいエイサー、実は死者を送る「ご詠歌」なんです。なので静かなエイサーが沖縄の中部平敷屋にあり、エイサー大会でも上位入賞し見直されています。



平敷屋エイサー

福島のお寺の和尚が、ご詠歌を学ぶために中国に命がけで渡ったものの、帰るときに漂流して沖縄に留まり、そこで広がったのがご詠歌エイサーというわけです。その形が色濃く残っているのが平敷屋エイサーですが、かなり激しく動くエイサーが観光で人気になり、沖縄らしさとしてそちらがトレンドになってしまったという余談でした。

戦場になれば、これらの伝統文化や日常生活、観光まで脅かされることを肝に銘じて。